



楽聖・服部良一① 三善貞司

地域史研究者

戦後日本に明るさを灯した作曲家

少年音楽隊から大阪フィルハーモニックオーケストラへの挑戦時代

服部良一は敗戦後の大混乱でまっ暗だった日本の世相を、名曲「青い山脈」や「東京ブギウギ」などで明るく力づけ、国民たちに生きる勇気をとりもどさせた作曲家です。実の妹で歌手の服部富子が、「うちのお兄ちゃんは、日本のベートーヴェンよ」と自慢したのも、けっして身びいきだけではありません。

良一は明治40年(1907)玉造(大阪市中央区)に生まれました。父は砲兵工廠(戦争に使う武器の製造工場。跡地は現在の大阪ビジネスパークの付近)に勤める工員さんで、貧しいながら律儀で正直な人格者、砂糖より甘い母にもかわいがられ、のびのびと育ちます。

東平野小学校に入学した良一は、成績抜群、「かおるちゃん」と並んで首席を争い、先生がたからも今度はどうちがトップやると言われたほどの秀才でした。このかおるちゃんが後の東京大学教授で国際的な法学者安井郁(かおる)です。晩年は原水爆禁止運動に生涯を捧げた尊敬すべき学者です。また先輩には作家武田麟太郎、後輩には織田作之助(本連載平成8年8〜10月号参照)がいる名門小学校でした。

ところが新聞配達までして家計を助けていた良一は、かおるちゃんのように中学校(旧制)に進むことはできません。担任の先生は気の毒がり、昼は工場で働き夜は天王寺商業学校の夜間コースで勉強する手続きをとってくれます。

「な、大きゆつなったら学者になろつな」とかおるちゃんに言われて、学者がどんな仕事か分からないのに、うん、なるなる。いっしょにがんばるな…とうなづいた良一です。

ひたすら角帽(かくぼ)国立大学生がかぶる帽子)にあこがれていただけに、くやしくてたまらない。ひまのあるときは木かげに座り、姉ちゃんが買ってくれたハーモニカを吹いて自分を慰める感じがやすい少年に、なっていました。

夜間コースを卒業するころ、女中奉公(当時の言葉)をしていた姉ちゃんが、「良ちゃんのハーモニカうまい。どう、いづもやに少年音楽隊できるんやて。受かる」と勧めてくれます。「いづもや」とは道頓堀にあるうなぎの大店(おみだな)です。

明治42年(1909)(三越呉服店(北区)は、かわい制服を着た少年音楽隊を結成し、店内でナマ演奏をして客を集めます。それが評判になり、あるとき阪急電車の社長小林一三がやってきて、「こらおもろい。うちもやる。うちは女の子でいこ」と真似をしたのが、宝塚歌劇の起りです。いづもやも広げたチェーン店を成功させるための話題づくりが必要で、少年音楽隊を作ることにしたのです。

大正12年（1923）9月、16歳になった良一は、「いづもや少年音楽隊第1期生」に選ばれます。そのころ高島屋にも音楽隊があり、トランペットの南里文雄や、ジャズ演奏の中沢寿士ら後に大活躍をする音楽家の卵がまじっていました。良一は彼らと合同して練習を始めますが、なにしろ独学です。彼らのすばらしい技量には、とうてい及びません。なに、負けてたまるかとそれこそ死にももの狂いになって稽古に励んで、自分の才能のなさに絶望します。

そんなある日、文雄が、

「お前、船場の灘万知^{なだまん}つてるか。あそこですごいライブやってるぞ」

と声をかけます。灘万なんて大名様の行くところやと思っていた良一は、こわごわのぞいて目を回します。アメリカ帰りのサックス（サキソフォンのこと。音量豊かでジャズに最適の管楽器）奏者前野港造が、熱演していたのです。文雄や寿士どころじゃない。神業です。

ポカーンと口をあけて聴きほれていた良一は、やがて眼をつりあげました。彼も人なら我も人や、よし、あの技を盗んでやるぞ」と決心し、何度も通いはじめます。

大正14年（1925）、大阪中央放送局（JOBK）が開局、大阪で初めてラジオ放送が始まりました。BKは「大阪フィルハーモニックオーケストラ」を結成し、広く団員を募集します。18歳の良一は見事に難関を突破して合格、いづもや少年音楽隊から移りますが、この大阪フィルの常任指揮者が最大の恩師E・メッテルでした。彼は大勢の団員のなかからなみはずれた良一の才能を見抜き、汝は石ころだが磨けばダイヤモンドになる。週に1回神戸の自宅に來い。特別に稽古をつけてやるぞと命じます。

それからの4年間、メッテルのきびしい指導は、文章では書けないほどでした。けれども良一はくじけません。こんな幸運はないと喜び、ただの1回も欠席することなく通い続けます。

生活に苦しかった良一は、フィルの練習のない夜にはダンスホールやカフェのバンドに加わり、さまざまな曲を演奏します。このバンドがフィルで学んだクラシックにプラスとなり、彼のレパートリーはびっくりするほど広がっていきました。

服部良一

明治40年（1907）玉造（大阪市中央区）生まれ。少年時代から苦学を重ね演奏技術の習得に励む。平成5年86歳没。国民栄誉賞受賞。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

（株）ファッションビジネス・御堂筋新聞